



## 特別賞 丸善株式会社賞

鴨長明著 市古貞次校注『方丈記』(岩波書店 1989)  
(中央新書・文庫コーナー：岩波文庫 黄-100-1)

経営学部4年 新野孝駿

著者が生きていたのは、未曾有の大災害の打ち続く平安末期であった。大火事、大飢饉、大震災、多くのものが失われ、当時、栄えていた平氏も滅亡の危機に瀕していた。著者はそのように陰鬱な時代を過ごし、この作品に人生無常の理を記したのである。また本書は当時実際に起こった数々の大災害を記録した書でもある。

鴨長明は賀茂御祖神社の神事を統率する鴨長継の次男として生まれた。恵まれた環境にあったものの、20歳になる前に庇護者である父を亡くした。彼は次第に閉鎖的な性格を強めていく。和歌の才能で世に認められるものの、出世争いに敗れ、長明は多難曲折の人生に無常を観じて、出家し山里に隠遁した。そして方丈記を記した。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世中にある人と栖と、又かくのごとし。常なるものは何もなく、変わらぬものなど何もない。彼はただひたすらに移りゆくものの儂さを語った。流れ行く時代のむなしさ、移り変わる世のはかなさ。彼は郊外の山里で世の中を睥睨して無常観を謳う。前半部は天変地異に翻弄される人の生や社会の地獄、後半部は方丈という小さな草庵を描き、彼の心の揺れ動きを記している。

安元の大火、治承の辻風、福原の遷都、養和の飢饉、元暦の地震。次々に起こる平安末期の大災害が詳述されていく。目に浮かぶ大災害の情景、その筆致は巧みを凝らして自然に弄ばれる人の運命を描く。人は何のために生まれて、何のために生きるのか。その問が文章の間隙に投げられていく。そして一転。後半部は長明自らの草庵での生活が語られる。自身の家系、住環境、出世隠遁する大原山、日野に移った方丈の庵の閑寂な生活。次第に彼は仏道へ心を傾斜させていく。そして終には草庵の生活に愛着を抱くことさえも悟りへの妨げとして否定し、一連の随筆を締めくくった。本書が記されたのは、今から丁度 800 年前、1212 年のことである。

昨年 2011 年は大災害が続いた。東日本大震災、大津波や原発事故に続いて、竜巻やゲリラ豪雨、相次ぐ巨大台風で大洪水。自然の脅威に打ちのめされているところに政情不安もあって今もなお日本の将来に暗い影を落としている。その様は平安当時と重なる点も多い。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」。絶望の時代を生きた長明の懐いた思考の終着点は、変わらぬものなど何もないということ。長明の描いた人生無常の考えは儂い。しかし、政争と戦乱に明け暮れた平安末期にあって、筆者の目は同時に来たる中世の夜明けを見据えていたはずだ。斜陽化した王朝貴族の背後から、疾駆する武士団の凜凜たる雄姿が彼にははっきりと映っていたはずだ。自然災害にあっても、人は生き続ける。ゆく河の流れはもとの水ではないけれども、絶えることもまたないのだから。